８　次の文章は『たまきはる』の一節で、体調を崩していた女院に作者がお仕えしている場面から始まる。読んで設問に答えよ。　　　　　　　〈北海道大〉二〇一九年度出題

　その夜より御足のあさましく冷えておはしますに、ものもおぼえず。御祈りも何事も心のままならん所にて思ふさまに申さばやと、心一つを砕けど、おほかた聞き入るる人もなし。この例ならぬ御事のはじめ、人は何ともイ思ひ分かざりしほどより、人候はぬ間に近く参りたれば、「や、いかがせんずる」と仰せ事ありし事のたびたびありしを、「ただ例ならぬほどは、さこそおぼえ候へ」など、ロことなきやうにのみ申ししかば、またとかく仰せらるる事もなかりし。後に思へば、いかに思しめしけるにか、また御物のなどのことばにやと、かたがたハあらぬさまにも申して聞かでと、つくづくと悔しき事ぞせんかたなき。

　霜月になりては、立たせおはしますことのなかりしを、ただの御美しさのせめて驚くべくもなき御気色に、人々はさらにも言はず、我が心だに、かばかりとも思ひまゐらせぬになどとおぼえて、「御前には、ゆゆしく御心劣りのせさせおはします。さまでの御事も候はぬに、ニなどかくえ立たせおはしまさぬ」と申ししを、六日のつとめても、御障子の御あとへ出でさせおはしますとて、やをらゐざりて御覧じ合はせて、ホ「心劣りの事」とてうち笑ませおはしましたりし恋しさの、ただこれほどの事もかずかずに、いかにせんいかにせんと心を砕くことのみ尽きせぬなり。大女院の限りの宮仕へしたる身にて、手をえかけまゐらせねば、我が手をまゐらせて、「これ探らせおはしませ」とて、御手の温かさのほどを知りまゐらせんと思ひしに、七日のの時ばかりの後は、我が身も心もなくなりにしかば、言ふかひもなし。

　　ヘいかにして思ひも出でじ見果ててしいとふべき世の憂さの限りを

注　驚くべくもなき御気色―驚く必要もない、心配する必要もないご様子。

心劣り―意気地のない、気が弱いこと。

ゐざりて―座ったままで動いて。

大女院の限りの宮仕ヘ―大女院は女院の母。作者が大女院の臨終の際にお仕えしていたことを指す。

手をえかけまゐらせねば―りがあって直接に看病できずにいたことを指す。

問１　傍線部イ・ロ・ニを現代語に改めよ。

問２　二重傍線部ハについて、「聞かで」とは何を聞き入れなかったのか、わかりやすく説明せよ。

問３　二重傍線部ホとあるが、誰のどのような態度であるか。その言動の意図を汲みつつ五〇字以内で説明せよ。

◎問４　二重傍線部ヘについて、何を「思ひも出でじ」というのか。具体的に三〇字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　イ＝Ａご病気であるかどうかのＢ判断がつかなかったとき

Ｂがなければ全体０。

Ａ＝５／Ｂ＝５

　　　ロ＝Ａ何事もないようにばかりＢ申し上げていたＣので

Ａ＝４〔「ばかり」がなければ減点２。〕

Ｂ＝４〔過去の「しか」を訳していなければ減点２。〕

Ｃ＝２

　　　ニ＝ＡどうしてＢこのように立つことができないでＣいらっしゃるＡのか

Ａ＝５〔疑問に訳していなければ減点２。〕

Ｂ＝３〔「できない」がなければ不可。〕

Ｃ＝２

問２　Ａ女院が作者だけに伝えた、Ｂ不安と体調不良の苦しみを訴える言葉。

Ａ＝５〔「作者だけに伝えた」がなければ減点４。〕

Ｂ＝５〔「不安」はなくても可。〕

問３　Ａ励ます作者の気持ちに応えるために、Ｂ自分から弱気だと言って気丈に振る舞おうとするＣ女院の健気な態度。（48字）

Ａ＝４〔「作者の気持ちに応える」がなければ不可。〕

Ｂ＝２〔同内容可。〕

Ｃ＝４〔「女院の」がなければ不可。末尾が「～態度。」でなければ減点１。〕

問４　Ａ女院が突然亡くなるというＢいとわしい現世のＣこの上ないつらさ。（29字）

Ａの「女院が亡くなった」という内容がなければ全体０。

Ａ＝２

Ｂ＝３〔「現世」がなければ不可。〕

Ｃ＝５〔「つらさ」がなければ不可。〕

【現代語訳】

　その夜から（女院の）御足が驚くほど冷えていらっしゃって、意識もはっきりしない。御祈禱も何事も（女院の治療のために）考えつく限りのことを思うとおりに申し上げたいと、一途に思っていたが、まったく聞き入れる人はいない。この尋常でない御出来事のはじめは、人々がまだ何とも問１イ（女院がご病気であるかどうかの）判断がつかなかったときから、人が出仕していない間に（作者が女院の）近くに参上すると、「ああ、（この苦しさを）どうしようか」と（女院が）おっしゃったことが何度かあったので、（私は）「単に（御身体の調子が）いつもと違っているようなので、そのようにお感じになっているのです」などと、問１ロ何事もないようにばかり申し上げていたので、（女院は）もうあれこれおっしゃることもなかった。後から思えば、どれほど（苦しく）お思いになっていたことであろうか、また（女院に取り憑いた）御物の怪などの言葉なのであろうかと、あれこれと本来（の女院の病気）とは違ったように申し上げて（女院のお言葉を）お聞きしないでと、しみじみと後悔されることもどうしようもない。

　十一月になってからは、（女院は）お立ちになることがなかったのだが、いつものお美しさのままでひどく驚く必要もないご様子に、人々はまったく何も言わず、私の心でさえ、それほど（重篤である）とも思い申し上げないようになどと感じて、「あなた様は、たいそう意気地がなくていらっしゃいます。そこまで大事でもございませんのに、問１ニどうしてこのように立つことができないでいらっしゃるのか」と申し上げたところ、（女院は）六日の早朝も、（お部屋の）障子の向こうにお出でになるといって、そっと座ったままで動いて（私と）御対面なさって、「意気地のないことですね」と言って微笑みなさった愛おしさであったが、たったこれだけのことも度重なると、（私も）どうしようどうしようとたいそう心配することばかりが尽きないのである。（私は）大女院の臨終の際にお仕えしていた（れをまとった）身で、（りがあって直接に）看病申し上げられずにいるので、自ら手をさしのべ申し上げて、「この手をお握りください」と言って、（女院の）御手の温かさのほどを知り申し上げようと思っていたのだが、七日の申の時ぐらいの後は、私は身も心も失われてしまったので（＝女院が亡くなってしまったので）、何とも言いようがない。

　なんとかして思い出さないようにしよう。見尽くしてしまったいとわしい現世のつらさの限りを。